



## 論文審査及び学力の確認結果報告書

論文博士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座		
学籍番号	16GR105	氏 名	前田 一明
審査委員	主 査	今田 匡彦	
	副 査	杉山 祐子	
	副 査	山田 厳子	

### (論文題目)

地域アート・プロジェクトを生成する：小さな音楽、ことばの実践の場としての架空哲学音楽カフェ

### (論文審査の要旨)

音楽とは何か。例えば、1990年代に日本で生まれた一人の人間にとって音楽とは何か。彼、または彼女が生まれ落ちたとき、どのような「音楽」が巷にあふれていたかを考えると、クラシック、ジャズ、ポップス、ロック、演歌などがある。これらは確かに「音楽」であるが、総体としての音楽ではない。これら全てに一貫するのが、西洋の調性機能を持つということ、西洋クラシック音楽が基盤となっているということである。しかし人々は、生まれたときに既に在ったということによって、疑問を持たず、この事実には気づかない。本研究では、この思考停止の状態を脱するべく一般市民が体験を通して、自身の言葉で音楽について考える場としての実践を構想することを目的とする。

実践を構想するにあたって重要な点は、習慣により染み付いた言葉、断定ではなく、体験に基づく自身の言葉で一から考えるということである。そしてこの考え方を実践し続けたのが池田晶子である。

また、読み手にわかりやすく書いた当時の詩作を嫌い独自の詩作へと向かったマラルメ、そしてマラルメと同時代に当時の音楽の修辭法、例えばワーグナーのライトモチーフを嫌い独自の作曲へと向かったドビュッシーを比較することで、音楽と言葉の有効な関係として「戯れ合う関係」を導くことができる。

専門用語や晦渋な言葉による哲学は、市井の人々を遠ざけたが、哲学の始まりは「考えること」である。したがって本来、哲学とは市井の人々に身近なものである。1990年代にバリで、すべての人間が持つ根本的な問題、すなわち生と死、そして考えるということを専門用語や晦渋な言葉によってではなく市井の言葉により再生させようと、哲学カフェが開催されるようになった。この哲学カフェの形態と、既存のクラシックコンサートの形態を組み合わせることによって、よりヴィヴィットな音楽教育実践の場としての哲学音楽カフェが形成される。

また、この実践から、〈小さな音楽〉、音楽的な言葉の行き先としてのアート・プロジェクト「みる・きく・つくる」を構想した。この実践では、参加者たちが、環境の肌理を感じ取り、言葉にトレースし、そこから〈小さな音楽〉を創作する過程が観察された。

哲学音楽カフェの実践や事後インタビュー、アート・プロジェクト「みる・きく・つくる」の実践の分析から、音楽と言葉が相互に関わり合い、創造を齎す様子が観察された。そして、これらの実践や分析を通して、新たな実践としての架空哲学音楽カフェが構想された。

### (学力の確認結果の要旨) 学力の確認結果日：2019 年2月2日

※弘前大学大学院地域社会研究科における学位論文審査方法等に関する申合せより

今日、杉山、山田の3名で口頭審査を行い、審査員から全体の構成について2つの質問があった。執筆者から言語と音楽についてのより詳細な説明があり、副査2名からは実践の集積による労作にあふれたと言評を得た。結果論の記述に一部不十分な点が見られるものの、全員一致で博士論文に相応しいとの評価に致した。結果＝合格